

■林家正蔵(初代) 落語家。怪談咄(化物咄)の祖。天保の改革で、鳴物入り噺を禁じられ、直後に没した。
はやしやしょうぞう
・・・・・・1781＝ 江戸和泉町新道で、商家下総屋久兵衛の子に生まれる。

田沼意次失脚1786＝ 5歳：

異学の禁・・・・1790＝ 9歳：

松平定信引退1793＝12歳：

幼時より、浅草蔵前の札差に奉公。

蝦夷地直轄始1799＝18歳：

いざ乃報復・ 1806＝25歳： 初代三笑亭可楽に入門。
三笑亭楽我(賀)と称し、可龍・笑三、林屋正三を経て、正蔵と改名。林町から長谷川町に転居した際、その借家が初代鹿野武左衛門の旧宅であると称し、一時2代武左衛門を名乗ったが、人気とりのための手段であったともいわれている。

フェトン号事件 1808＝27歳：

可楽の門人でありながら林屋を名のることからもわかるように芸風は可楽には似ず、むしろ初代三遊亭円生に近く、舎弟分となり、円生の兄桃月庵白酒よりネタをゆずられていて、

ゴロツキ拿捕 1811＝30歳： 式亭三馬「浮世床」に朝寝坊夢羅久・三遊亭円生と並び記されるなど、 早くも頭角を現し、

・・・・・・1815＝34歳： 可楽から独立の披露のためか、*中橋の木屋で噺の会を開く。その際、式亭三馬に依頼して書いてもらった小冊子「林屋物語」を配布。以後、仕掛けや人形を用いる怪談噺を売り物にし、

杉田玄白没・1817＝36歳： *江戸きっての盛り場、両国広小路に寄席を取得して、軌道にのった。

水野忠成老中1818＝37歳：

正月2日より一年中、昼間の興行で、毎日一門とともに出演。

絵に巧みで、仕掛けの工夫にも長じ、江戸見物の客を喜ばせるのを至上とした正蔵の芸風は大坂の水にもあい、孫弟子にあたる初代、林家正三にはじまる上方の林家派として根づいた。

シボムト鳴滝塾1824＝43歳： *滑稽本「先開而三升の世界」以降、寄席の景物にしようと、

異国船打払令1825＝44歳： 「東海道四谷怪談」初演のさいにも仕掛けの工夫に参画したという。合巻「尾尾屋於蝶三世談」や、

・・・・・・1826＝45歳： 噺本「軽口頓作ますおとし」、

日本外史・・・・1827＝46歳： 化物咄の成長を窺わせる噺本「新作笑話之林」、

シボムト追放・ 1829＝48歳： 噺本「新作笑話たいこの林」、

鼠小僧磔・・・・1832＝51歳： この頃には、“怪談咄”が急速に広まって行く。一枚刷「七宝はなし」、

天保大飢饉始1833＝52歳： 噺本「落噺笑富林」、

高島砲術・・・・1834＝53歳： 噺本「百歌撰」、

滑稽+人情本 1835＝54歳： なぜか剃髪して正蔵坊を名のるが、すぐに還俗。

・・・・・・1836＝55歳： 噺本「おとしばなし年中行事」、

大塩平八郎乱1837＝56歳： 滑稽本「宝合勢貢之蔵入」など、文章体でさまざまなものを刊行、

勸進帳初演・ 1840＝59歳： 妻に先立たれ、

天保改革弾圧1842＝61歳： *天保の改革で、鳴物入り噺を禁じられ、直後に没した。
噺のほか、狂歌・浄瑠璃をよくし、著述には噺本「笑話の林」や合巻「怪談春雛鳥」などがある。